

日本現代中国学会第75回全国学術大会のご案内

会員各位

2025年の日本現代中国学会全国学術大会は、5月31日（土）と6月1日（日）の両日、愛知大学名古屋校舎において開催されます。

今大会の共通論題は「アジアのなかの中国 分断のなかのアジア」です。共通論題のほか、各地域部会のご協力により3つのテーマ分科会、そして「文学・芸術」「歴史・思想」「映画・メディア」「経済・社会」「行財政」「政治・国際社会」の各自由論題もあわせて、多数の報告者を募ることができました。良質で活発な討論が行われること期待するとともに、多くの会員の皆さまのご参集をお待ち申し上げます。

会場：愛知大学名古屋キャンパス(<http://www.aichi-u.ac.jp/profile/campus-nagoya.html>)

講義棟 10階および8階

〒453-8777 名古屋市中村区平池町 4-60-6

- ① 徒歩の場合 JR・名鉄・近鉄・地下鉄の各名古屋駅より、徒歩約15分。
- ② あおなみ線の場合 名古屋駅より1駅（約1分）「ささしまライブ21」駅下車、直結するデッキを徒歩数分。
- ③ シャトルバス利用の場合、名鉄名古屋駅向いの「ミッドランドスクエア前」から「ささしまライブ24」まで（約4分）、下車すぐ。

*シャトルバスは、平日は午前7時～午後10時の間約10分間隔、日曜日は午前10時～午後9時の間約12分間隔。



大会1日目 プログラム

5月31日(土) 9:00~	受付(講義棟 10F エレベーターホール前)
9:30~10:30	東アジア学術交流会(講義棟 L1003)※
10:45~11:45	総会(講義棟 L1003)
12:00~13:00	理事会(講義棟 L1001)
13:00~17:30	共通論題:(講義棟 L1003)※下記参照
18:00~19:30	懇親会(キャンパスレストラン)

※関西西部会企画イベント。詳細は学会掲示板をご参照ください。

共通論題プログラム(講義棟 L1003)

共通論題: アジアのなかの中国 分断のなかのアジア

司会・趣旨説明:

13:00~13:10 吉川次郎(中京大学)

趣旨:

いまから100年前の1925年、広東省広州でベトナム青年革命同志会が組織され、アジアの民族独立運動における中国の存在を象徴する動きとなりました。過去の100年間を大きな視野から振り返るとき、アジアと中国のつながりは確実に深化してきました。他方で、現在、深刻な米中対立を背景として、南シナ海や台湾の問題、あるいは中印国境での衝突など、アジアでは中国をめぐる分断状況が広がっています。本来はアジアをつなぐ機能も果たすはずの「一帯一路」についても、中国脅威論の文脈で論じられるケースが多くみられます。

そこで、2025年度の共通論題では、中国とアジアが互いに浸透し融合する一方で、分断が強化されている現状をあらためて確認し、過去をふまえながら、現在と未来についての討論を展開したいと思います。まず小笠原淳会員から、アジアにおける華語文学・表象文化の広がりについてご報告いただきます。つぎに、熊倉潤会員からは中央アジア地域と中国との結びつきについて、青山瑠妙会員からは「グローバルサウス」の動向と中国との関係について、ご報告をいただきます。最後に濱下武志会員から、中国とりわけ華南地域と東南アジアとのつながりについてご報告いただきます。さらに、巖善平会員と津守陽会員

より、社会・人文科学にわたるコメントをお願いし、全体での議論へとつなげていきます。

第 1 部 報告次第：

13:10～13:40 小笠原淳（熊本学園大学）「破局と再生への模索——華語文学におけるカタルシスの表象」

13:40～14:10 熊倉潤（法政大学）「中国とトルキスタン：近代以降の歴史の変遷」

14:10～14:40 青山瑠妙（早稲田大学）「中国とグローバルサウス」

14:40～15:10 濱下武志（東洋文庫・龍谷大学）「潮州商人の華南—東南アジア間ネットワーク：地域の視角から見た改革開放期の中国とアジア 1980-2010」

※報告タイトルはいずれも仮題

15:10～15:30 休憩

第 2 部 討論

コメント：

15:30～15:45 巖善平（同志社大学）

15:45～16:00 津守陽（京都大学）

16:00～17:30 全体ディスカッション

懇親会（厚生棟 1 階 キャンパスレストラン）

18:00～19:30 参加費については下記参照

大会2日目 プログラム

6月1日(日) 9:00～		受付(講義棟8F エレベーターホール前)	
自由論題・ テーマ分科会	会場1 L803	会場2 L804	会場3 L805
午前の部 10:00～12:00	自由論題① 文学・芸術	自由論題② 歴史・思想	分科会① 「改革開放萌芽期の中国を歴史化する(第2回)」
午後の部1 12:45～14:45	自由論題③ 映画・メディア	自由論題④ 経済・社会	分科会② 「だれが中国を『安全にする』のか?—内政と外交の諸相」
午後の部2 15:00～17:00	分科会③ 「学校教科書と自己認識、歴史認識の形成—現代中国と日本とのあいだで」	自由論題⑤ 行財政	自由論題⑥ 政治・国際社会

自由論題・企画分科会プログラム(講義棟8階)

時間：午前の部 10:00～12:00、午後の部1 12:45～14:45、午後の部2 15:00～17:00

自由論題①〔文学・芸術〕

座長 西村正男(関西学院大学)

・趙彬(愛知大学・院)

「現代台湾同志文学と頼香吟の『其後それから』の叙情表象」

・小栗宏太(東京外国語大学)

「職業としての作詞家：「填詞」からみる香港カントポップの個性」

・城山拓也(東北学院大学)

「社会主義リアリズムと装飾—建国後の張光宇と雑誌『装飾』をめぐって」

自由論題②〔歴史・思想〕

座長 柴田哲雄（愛知学院大学）

・肖童（鹿児島大学・院）

「外国人のなかの長江中流域（仮）——イザベラ・バードと内藤湖南の旅行記を手がかりに——」

・川尻文彦（愛知県立大学）

「李大釗のマルクス主義受容の再検討」

・周家莉（東京大学・院）

「思想改造と大衆動員——1950年代中国における宣伝網の構築」

自由論題③〔映画・メディア〕

座長 神谷まり子（日本大学）

・李茗銳（大阪公立大学）

「『アバン・ポップ』映画『恋する惑星』について」

・陳琪栄（大阪公立大学）

「中国「映画小説」の濫觴——周瘦鵑の〈影戯小説〉」

・車明釗（大阪公立大学）

「早期武侠映画の特徴と表象——1929年『紅俠』を中心に——」

自由論題④〔経済・社会〕

座長 梶谷懐（神戸大学）

・陶佳欣（同志社大学・院）

「高齢化が進む中国農村における社会保障の制度と実態」

・尹思源（大阪公立大学・院）

「新制度論の視点から見た中国の「曖昧な制度

自由論題⑤〔行財政〕

座長 何彦旻（追手門学院大学）

・劉一鶴（慶應義塾大学・院）

「『社会管理の統括者』から『張り子の虎』へ：中国民政部の権威後退と2018年国務院機構改革の再解釈」

・趙汗青（慶應義塾大学・院）

「中国における漸進的財政改革——財力集中型の財政体制改革の政策過程」

自由論題⑥〔政治・国際社会〕

座長 砂山幸雄（愛知大学）

・錢俊華（東京大学・院）

「日中戦争の記憶と中国人アイデンティティ——1970年代初期の香港の保釣運動を中心に」

・李曉達（愛知大学・院）

「新時代における習近平の支配の正当性の構築——統一台湾を中心に」

・袁晨旭（東京外国語大学）

「中国 SNS 上における米国の下層社会に関する世論の形成～「丁胖子金牌講師」現象をめぐる～」

分科会① 「改革開放萌芽期の中国を歴史化する（第2回）」

2024年度の全国学術大会（法政大学）において「改革開放萌芽期の中国を歴史化する」を企画した。このテーマ分科会の目標は、「①これまで十分に利用されてこなかった史資料を活用して当時の状況を復元し、歴史事実を確定させること、②その確定させた歴史事実を比較の視座から精査して、より客観的な歴史事実を抽出すること、③その客観化された歴史事実を可能な限り中国近現代史という文脈のなかに位置づけ直し、歴史化すること」だった。当日の報告と討論は②③に貢献するものではあったが、不完全燃焼だったことも事実である。

そこで、2025年度の全国学術大会（愛知大学）では「歴史化」の程度を加速させるために、下記のようなプログラムを組むことにした。

座長：中村元哉（東京大学）

報告：

- ・金子肇（広島大学）「改革開放萌芽期の全人大改革と民国議会史の射程」
- ・吉見崇（東京経済大学）「改革開放萌芽期の政治と司法をめぐる模索」
- ・家永真幸（東京女子大学）「改革開放萌芽期中国の国家統一論における多党制問題」

討論：

泉谷陽子（フェリス女学院大学）

松本充豊（京都女子大学）

網谷龍介（津田塾大学・非会員）

分科会② 「だれが中国を『安全にする』のか？——内政と外交の諸相」

中国の「台頭」が国際的な論点となって久しい。レスター・ブラウン（今村奈良臣訳：1995『だれが中国を養うのか？』）は、経済成長と人口増加を続ける中国が近い将来に世界的な食糧安全保障のボトルネックになると警鐘を鳴らした。はたして同国は、2004年に農林水産物の貿易額ベースで純輸入国に転じ、2010年代はじめには世界最大の輸入国となった。そして今日、食糧に限らずエネルギーや科学技術を含む非伝統的安全保障領域、ひ

いては安全保障全般において、そのプレゼンスは決定的となった。

1989年時点で同国の国防費は、米国のそれと比べると30分の1に過ぎなかったが、冷戦終結以来、2010年（前年比7.5%増）を除いて2015年まで二桁成長を続け、2023年には米国の3分の1を占める。その帰結として、米国は中国を「唯一の競争相手（the only competitor）」と名指し、西側諸国は一様に対中「競争政策」を措定しては、多元的な包囲網を形成してきた。

他方で中国政府は、2005年12月に「中国の平和的発展の道」白書を、また2011年9月には「中国の平和的発展」白書を発行し、「中国は覇を唱えない」と反駁する。軍当局も、「国防費」の範疇の違いこそが争点であると、米国による「悪意に満ちた誇張」を牽制するほか、外交部は国防費について、公表値に間違いはないとの「平和的発展」論を展開してきた。

この間に中国政府は、グローバルな安全保障化の動きに応じて安全保障観を大きく変化させてきた。同国は、1990年代後半から非伝統的安全保障への問題関心を高めるも、国連などの（新）介入主義的スキームは拒否する。特に習近平政権は、領土主権的な要因も内包した総体的国家安全保障観を提起し、反スパイ法を制定するなど、全方位的な「安全」の確立を急いできた。

本分科会では、中国が措定してきた「安全」がいかなるものか、あるいはその追究・実現にむけた内政的・外交的諸相について報告いただく。それら報告に基づき、「平和」を追求する同国の外交が、いかなる国際的余波をもたらしたかについても議論することで、内政と外交の連環を討究したい。

座長・討論：加治宏基（愛知大学）

報告：

- ・石塚迅（山梨大学）「安全・安心と人権—中国の状況—」
- ・鈴木隆（大東文化大学）「習近平政権の「安全」のジレンマ」
- ・諏訪一幸（静岡県立大学）「『大国』認識と『安全』」

※報告タイトルはいずれも仮題

分科会③ 「学校教科書と自己認識、歴史認識の形成——現代中国と日本とのあいだで」

近現代世界において、学校教育はその規模と影響力の大きさから歴史的に大きな役割を果たしてきた。なかでも学校教科書は、多くの学生が日々手に取り、そこから少なからぬ影響を受けてきたであろう。そのため、歴史資料として見ても、非常に興味深い対象である。

そこで本分科会では、「学校教科書と自己認識、歴史認識の形成—現代中国と日本とのあいだで—」をテーマとして、現代中国と日本において学校教科書がどのように人々の自己認識や歴史認識の形成に影響を与え、歴史的な役割を果たしてきたのかを探る。

まず、王天驕氏（名古屋大学博士候補研究員）が「戦後華僑学校の『国語』教科書と『華僑』意識の芽生え—神戸中華同文学校を中心に—」と題して報告する。王氏は、戦後の在日華僑学校の中でも比較的規模が大きく、国共対立の中で中立的な道を歩んだ神戸中華同文学校に着目し、戦後間もない頃から 80 年代までの各時期に用いられた「国語」教科書を取り上げ、そこにどのように「華僑」意識が現れ、教えられてきたのかを探る。

次に、土屋洋会員（名古屋大学）が「中国共産党根拠地の歴史教科書—日中戦争をめぐる叙述の変遷を中心に—」と題して報告する。土屋氏は、日中戦争下、延安を中心に各地に築かれた中国共産党根拠地で編纂された歴史教科書を可能な限り網羅的に収集・整理し、中華人民共和国の歴史教科書へと続く系譜を明らかにするとともに、日中戦争をめぐる叙述の変遷を跡づけ、根拠地歴史教科書の特色に迫る。

さらに、討論者として、華僑華人研究を専門とする陳來幸会員（ノートルダム清心女子大学）と日中戦争史研究を専門とする馬場毅会員（愛知大学名誉教授）がそれぞれの専門的見地からコメントを行い、討論を深める。

本分科会を通じて、現代中国と日本において学校教科書がいかなる自己認識や歴史認識を打ち出してきたのかを資料に基づきながら明らかにし、こうした自己認識や歴史認識が培われてきた歴史と、それが向かう未来を見通すことを目指す。

座長：馬場毅（愛知大学）

報告：

・王天驕（名古屋大学・非会員）「戦後華僑学校の国語教科書と『華僑』意識の芽生え—神戸中華同文学校を中心に—」

・土屋洋（名古屋大学）「中国共産党根拠地の歴史教科書」

討論：

陳來幸（ノートルダム清心女子大学）

● 大会実行委員会からのご案内

・参加申し込みは、5月17日までに以下の google フォームを通じてお願いいたします。

<https://docs.google.com/forms/d/1aQg5vTUArmMM7188NkYiIBenoptMrcE2epM3nRgfbRk/edit>

・大会当日、愛知大学に到着されましたら、最初に受付にお越しくください。名札を作成いただきますので、名刺がある方はお持ちください。

なお、5月31日（土）プログラム終了後、キャンパス内で懇親会を開催します。奮ってご参加ください。参加費は一般会員 5000 円、院生（学生）3000 円です。当日、受付にてお支払いください（名札に参加印をお付けします）。

・報告資料の入手方法は、ML で送付される「(会員限定：報告資料掲載 URL 送付) 日本現代中国学会第 75 回（2025 年）全国学術大会」の内容をご参照ください。また、大会当日にも、報告資料の掲載ウェブサイト情報を受付などに掲示します。

・両日とも中国関係書店による書籍の出張販売を予定しています。是非ご利用ください。

・キャンパス内食堂は閉店しています（キャンパス近くにはコンビニやレストランがあります）。

・託児サービス利用補助の申し込みは5月17日までに、大会実行委員会（genchu2025[at]gmail.com：[at] を@に変更してください）までご連絡ください。開催校がサービスを手配いたします。

・キャンパスへの車両入構は制限されています。徒歩または公共交通期間をご利用ください。

・宿泊施設についてはご自身で早めにご予約ください。名古屋駅周辺には多数のホテル等がございます。

・愛知大学構内は、決められた喫煙所以外は禁煙となっています。

・大会初日の5月31日（土）の午前10時45分より総会を、午後12時より理事会を開催しま

す。ぜひともご出席ください。

日本現代中国学会第 75 回全国学術大会

実行委員長 加治宏基

共通論題企画担当 吉川次郎

お問い合わせ先

〒453-8777 名古屋市中村区平池町 4-60-6

愛知大学現代中国学部 加治宏基研究室気付

E-mail: genchu2025[at]gmail.com

([at] を@に変更してください)